

Vol.12
2019年
春・夏号

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
(CEL弘本由香里、B-tran橋本護・小倉昌美)
http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

発行：大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
※U-CoRo=ゆーこーろ (上町台地コミュニケーション・ルーム)
問合せ先：tel.06-6205-3518 (担当：CEL弘本)

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす「上町台地」。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方…。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を制作いたします。

上町台地から見はるかす 博覧会“百年の計”で築いた大阪とは

19世紀から20世紀へ、産業・社会の大転換期を象徴する政府主催の博覧会が、大阪・上町台地で開催されました。「第五回内国勧業博覧会」、その内容・規模ともに明治維新以来の同博覧会とは一線を画すものでした。殖産興業や教育、消費文化の普及に留まらず、百年の計で都市・大阪の近代化、再起動を目論み、その後の「大大阪」に至る、グランドデザインが背景にありました。博覧会が残したものは何なのか、消えたものは何なのか、上町台地から見はるかせば、次なる百年の計へと眼差しが向かいます。

1903年 第五回内国勧業博覧会

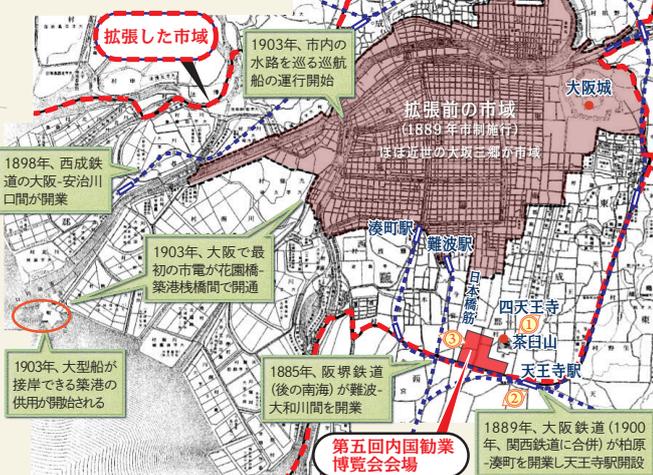
第五回内国勧業博覧会は1903年3月1日に天王寺今宮と堺の大浜で開幕。153日間の会期中の入場者は435万人を超え、全5回の内国勧業博覧会中、最大規模のものとなった。この博覧会は、近代都市・大阪の将来を切り拓いていくための骨格づくり、インフラの整備、都市文化の内外への発信とともに進められた。



四天王寺本坊庭園の八角亭は内国博後に移築されたもので、関連する建物では今も残る唯一のもの。

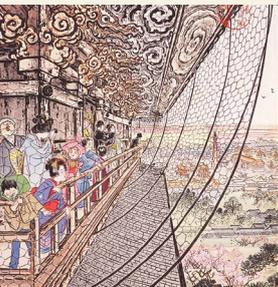
1897年 第1次大阪市域拡張

この年、大阪市は、近代的産業都市としての空間的広がり追求で接続する町村を編入。市域は約3.7倍に拡大した。



大阪の市域拡張と内国博覧会 古川武志氏 (大阪市史料調査会調査員)

20世紀に入る前後の時期は、日本で産業革命が進んだ時代。この頃、都市といふもの役割が変わってきます。人が住んでいるところが都市だというのが近世的な捉え方から、都市ではエリア、市域であるという考え方への変化です。例えば、大阪城とか大阪駅とか築港などを、第1次拡張によって市域に取り込んだらうて、都市圏としての機能をどう整備していくのが課題になってきます。内国博の会場も拡張後の市域に位置し、その開催に向けては、交通網の整備などが重要項目が上がってきたわけです。半歩先の近未来、次代の都市はどうあるべきかを人々に目の当たりにさせることも博覧会の目的でした。それは1925年の第2次市域拡張に受け継がれ、関市長は社会問題への対応を語りましたが、当時の大大阪博覧会も、次につくるべきは健康的で美しい都市だということを示すとともに、担い手としての市民意識の醸成をもめざすものとなりました。



四天王寺から会場を眺望

四天王寺から望む内国博の会場風景。眼下に展示館が建ち並び、望楼や美術館も見える。会場の先に農村風景が広がるなかを機関車が走っている。(山本松谷「荒蕪山四天王寺より博覧会を望むの図」『風俗画報』臨時増刊269号 1903年6月、同冊子図版は、国立国会図書館デジタルコレクションより)

“科学万能時代”の風潮に警鐘の意も込めて

「四天王寺大釣鐘」は、高さが8m弱、重さ約157tの巨大なもの。この世界最大級の鐘は「聖徳太子千三百年御聖忌」に向けた日玉事業として鑄造され、この内国博で初めて披露された。その後、戦時体制下の1942年に解体され金属供出された運命をたどった。1907年に建てられた大鐘楼は現在の芙蓉堂。

生活を一新する科学技術も

新しい時代を強く印象付けたのは米国製の8台の自動車。横浜の貿易商社が出品し、会場内でデモンストレーション走行も行った。電動式のエレベーターを多くの人々が初めて体験したのもこの時。また、50人ずつが入って見物できる133坪の巨大な冷蔵庫もお目見えした。



エレベーターを備えた高塔から築港も一望

会場建設の大部分を請け負ったのが大林芳五郎率いる新興の建設会社・大林組。同社は築港建設などの大阪の都市インフラ整備にもあつたが、内国博で設置した望楼は「大林高塔」と呼ばれ、地上約50mの展望所からは会場周辺はもとより大阪湾までが見えるかされた。大阪初の電気昇降機(エレベーター)を備えており、近代的高層建築の時代を予感させるものだった。(『大林エレベーター』『風俗画報』269号)

余興動物園 パノラマ世界一周館 学術人類館 ※場外施設

出現した近代都市の祝祭空間

正門から伸びるメインストリートには噴水と緑地、両側には本格的な洋風建築の展示館が整然と並び、会場はまさに近未来の都市空間を感じさせるものだった。同時に、この内国博にあわせ、国内はもちろん海外からも市内に来訪者が増加。公会堂やホテルも整備され、名所旧跡はもとより市内全域が祝祭的な雰囲気にも包まれた。

電気時代の幕開けを告げたイルミネーション

1900年のパリ万博を手本にして、夜間のイルミネーションが取り入れられた。展示館や美術館などは数多くの電球で縁取られ、噴水は明かりに照らされた。国内で初めての夜間開場が行われ、場内の輝きは人々の目を奪い、電気時代到来を印象づけた。(『第五回内国勧業博覧会電灯装飾の図』『風俗画報』269号)

「第五回内国勧業博覧会全景明細図」(田井久之助 1903)に施設名等を追加

万国博の趣をもった国内博
日清戦争後の新領土・台湾の文物を紹介する台湾館が設けられたほか、参考館には、英仏独米露など海外の十数か国が出品。さらに日本は貿易拡大を目指すカナダや欧米商社の数社は特設館を出すなどして、内国博と称しながらも万国博覧会を想起させるものとなった。

内国博最大の来場者を呼んだ数々の余興・娯楽、遊戯施設

1900年のパリ万博以降、博覧会は殖産興業の目的から、より娯楽性を強めたものになってきた。この内国博でも集客に大きく寄与したのは、会場内外に設けられた、不思議館、メリゴーランド、ウォーターシャフト、大曲馬、余興動物園、堀の水族館などの様々な娯楽施設だった。

茶臼山の河底池を利用したウォーターシャフト ※3



世紀を駆けて、上町台地は大阪再生の揺り籠“博覧会の台地”だった!?

上町台地から見はるかす博覧会“百年の計”で築いた大阪とは

未来の都市と暮らしのイメージを、実物大で出現させ、何十万、何百万、何千万もの人が、驚きや憧れや理想を共有する。博覧会は、人々の心をつかみ、産業・技術の振興、平和、地域の発展、災禍からの復興等を推し進める装置として、20世紀を造形してきました。大阪でも数多の博覧会が行われてきましたが、上町台地での開催件数は群を抜いています。この地が大阪の都市形成史の中で、未来を揺籃する境界域・結節点としての役割を担い続けてきたのだとすれば、今改めてその役割が問われているのではないのでしょうか。

上町台地で開催された博覧会

開催年	名称	場所(主催)
1879年	大阪博覧会	府博(大阪府)
1903年	第五回内国勧業博覧会	天王寺・堺(政府)
1906年	戦捷記念博覧会	天公(大阪市)
1906年	こども博覧会	府博(大阪府)
1911年	第二回こども博覧会	府博
1913年	旅行博覧会	府博(旅行博覧協会)
1913年	明治記念拓殖博覧会	天公(大阪商工会)
1913年	関西教育博覧会	天公(大阪市教育会)
1914年	第二回発明品博覧会	天公(帝国発明会(社))
1914年	第二回明治記念博覧会	天公(中国日報社)
1915年	第七回日本産業博覧会	天公(日本産業協会)
1915年	大阪衛生博覧会	天公(大阪衛生組合連合会)
1916年	大正記念大阪博覧会	天公(大阪商業会議所)
1918年	大阪化学工業博覧会	天公(大阪商業会議所)
1920年	新聞博覧会	天公(大阪電報通信社)
1923年	大阪市電気軌道 滿二十年交通博覧会	天公(大阪市)

1925年 大大阪記念博覧会

第2次市域拡張による「大大阪」誕生に合わせ、毎日新聞社が主催した博覧会。本館では、大正シマを中心に「水」「交通」「電化」「キネ」(社会事業)など27のテーマで都市・大阪の現状や未来像を示すなど、「大大阪」の理想が掲げられた。3月15日から47日間の会期中に天王寺と大阪城の両会場に180万人の入場者を集めるほどの盛況で、終了後に博覧会の剰余金をもとに大阪都市協会が発足した。



大阪城会場の天守閣跡に建てられた豊公館

1926年 電気大博覧会

港区八幡町・天公(電気協会)

1927年 衛生大博覧会

天公 勧業館(大阪新報社)

1928年 国産原動機博覧会

天公 勧業館(大阪国産振興会)

1932年 満蒙大博覧会

大阪城(夕刊大阪新聞社)

1933年 競馬法実施十周年記念馬匹博覧会

大阪城東練兵場(帝国馬匹協会は)

1937年 第三回大阪産業工芸博覧会

大阪市立美術館(大阪府(社))

1938年 第四回大阪産業工芸博覧会

大阪市立美術館(大阪府(社))

1948年 復興大博覧会

天王寺区夕陽丘一帯(毎日新聞社)

大阪府発足 1889
日清戦争 勃発1894
大阪市第1次市域拡張 1897
築港の供用開始 大阪市電開通 1903
日露戦争 勃発1904
新淀川 完工 1909
大正元年 1912
通関閣完成 1912
第1次世界大戦に参戦 1914
中央公会堂落成 1918
関東大震災 1923
大阪市第2次市域拡張 1925
昭和元年 1926

大阪城 天守閣再建 1931
梅田・心齋橋 地下鉄開通 1933
室戸台風 1934
日中戦争 全面化 1937
太平洋戦争 開始 1941
大阪大空襲 終戦 1945

日本万国博覧会開催 1970
平成元年 1989
国際花と緑の博覧会 1990
阪神淡路大震災 1995
大阪大震災 2011
あべのハルカス開業 2014

内国博の会場跡地は、今に続く公園・動物園と新世界に!



市域南端のこの土地は、日露戦争中に陸軍が使用したのち、娯楽・文化地域としての開発が目指された。東側は大阪市が「天王寺公園」として整備、西側は大阪土地建物(株)に委ねられ「新世界」開発がはじまった。

天王寺公園 1909年の開園当時、本格的な都市公園としては市内唯一のもので、その後、多くの博覧会の会場としても使われた。1915年、この公園内に日本で3番目の動物園が誕生。開園に際しては、府立博物館(本町橋)に移されていた内国博の余剰動物園の動物も加わった。

新世界 1912年、南側に遊戯施設などが並ぶ「ルナパーク」が開園。シンボルの通天閣は凱旋門にエッフェル塔を載せた様を模したものである。北側街路もバリエーションに富んだ開放的なものに仕上がった。ルナパークは1923年に閉園するが、新世界には芝居小屋や映画館が集まり、一大娯楽地として発展する。初代通天閣は1943年に火災に遭い解体されたが、戦後の1956年に2代目が再建された。

「大阪市・ソノマ地区」(1924)に描かれた新世界と天王寺公園 大阪くらしの今昔館提供

たぐいまれなる都市周縁の開発 加藤政洋氏(立命館大学文学部教授)

川柳作家の岸本水府(きしもとすいふ1892-1965)は、第五回内国博覧会を「大阪の縁で近代都市に移しかえ」るほどに、大きなインパクトを残したイベントであったと評しています。開催を機に周辺地域の整備が進められ、たとえば黒門市場もその前年に誕生しました。会場の跡地利用にも興味が持たれます。日露戦争時には一部が捕虜を収容する施設として利用されたこともあり、その後、跡地の東西はじつに特色ある用途に分割されたのでした。周知のように、東側(旧天王寺村)は天王寺公園となり、西側(旧今宮村)は新世界として再開発されました。上町台地の崖下に天王寺動物園が設置されたことも面白く、動物園と(かつては花街でもあった)盛り場とが接しているというのも、他都市に例がないのではないのでしょうか。ここは都市の周縁から賑わいの巷へと変じた、たぐいまれなる空間と言えます。

内国博覧会後に花開く映画産業 武部好伸氏(作家)

荒木和一は、1896年12月に、自身が輸入した映写機「ファイタスコープ」を使い、難波で日本初の映画上映を行なった人物。彼は後に第五回内国博にも関わりました。1900年にはハリワ博に赴き、映画が大々的に活用されているのに驚くとともに、「電気光学宮」で行われていた舞踏家ロイ・フラーの光の舞に大いに感銘を受けたそうです。そして、荒木が大阪の内国博で企画したのが「不思議館」。ここで踊り、大人気を博したカーマンセ嬢をアメリカから連れてきたのもおそらくは彼。しかし大きな謎が残ります。内国博では映画がほとんど活用されず、ハリワ博を参考に取入れたのは電飾・イルミネーションだったということ。日本で映画の常設館がで始めるのはこの後です。さて、内国博を経て、荒木は跡地にできた新世界の開発会社顧問に就任しますが、やがてここは映画館や娯楽施設が立ち並び一大興行地となりました。

1925年 第2次市域拡張と「大大阪」

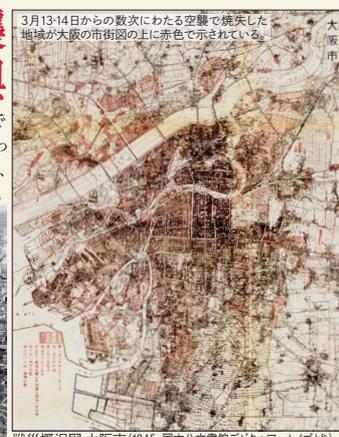
第1次市域拡張の後、内国博を経て日露戦争(1904)から第1次大戦(1914)に至る間に、大阪では紡績業など近代工業が大きく発展。さらに重工業もたちあがり、大阪は著しい経済発展を遂げた。1925年の第2次市域拡張は、人口密集や市街地の無秩序な拡大による生活環境の悪化などの社会問題を解決するための都市環境整備の目的もあった。これにより、面積181.68平方キロ、人口211万人超と、東京をしのいで日本一の都市となり、「大大阪」(だいおおさか)と呼ばれる時代を迎えた。



第1次拡張の際に残された西成郡と東成郡の全てを大阪市に編入。旧市域には従来の東西南北のほかに新たに天王寺、浪速、港、此花、また新市域には西成、淀川、東淀川、東成、住吉の各区が設置され13区となった。

1945年 大阪大空襲 焼け跡からの復興

1945年3月13日深夜から14日未明にかけての大空襲で焼夷弾が投下された大阪市内は全域にわたって火の海となった。その後も何度も空襲被害を受けた大阪市街だったが、戦後は次第に人々が戻り、焼け野原からの復興が始まった。



被災状況図 大阪市(1945、国立公文書館デジタルアーカイブより)



戦災で廃墟化した大阪市内(左)は南海難波駅。1945年10月13日撮影。毎日新聞社提供

復興大博覧会と夕陽丘 柳原 勝氏(てんのうじ観光ボランティアガイド協議会)

私は天王寺区の夕陽丘で生まれ育ちました。大阪大空襲の時は中学一年生。母と妹と3人で火の海を逃げまどった夕陽丘で1948年に復興博が開かれました。戦災跡地の240名の地主が、博覧会場への土地提供を受け入れて工事が始まり、やがて敷地周辺が板垣に囲まれ、通り抜けができなくなったのを覚えています(笑)。当時はみな食べていくのに精一杯で、私は博覧会には行っておらず…。大盛況のうちに会期が過ぎた後、観光館の建物は市立文化館から婦人会館になり、今はクレオ大阪中央に。復興館は天王寺郵便局になっています。戦争未亡人の母子寮が設けられ、その南につづく道に20軒ほど新築住宅が並びました。理想の文化的な街を目指してつくられた場所でしたが、実際に、賑わって、街らしくなるには、それからまた時間が必要でした。

※年表は、参考文献②の西口忠氏論考中の「大阪の博覧会一覽」及び文献③の寺下勲氏による「日本博覧会年表」などをもとに作成。
※表内図版は当時の絵葉書(大阪市立図書館デジタルアーカイブより)

- ※参考文献①: 国雄行『博覧会の時代: 明治政府の博覧会政策』岩田書院 2005
- ②: 『大阪春秋』第140号「特集: 大阪と博覧会」新風書房 2010
- ③: 別冊太閤「日本の博覧会一寺下勲コレクション」(監修 橋川紳也・平凡社 2005)
- ④: 山路勝彦『大阪、誰のいのちを? 二つの万国博覧会の解剖学』関西学院大学出版会 2014
- ⑤: 森延昭『昭和23年復興大博覧会』(『大阪春秋』第91号大阪春秋社 1999)



現在の天王寺公園、後方にはあべのハルカスがそびえる